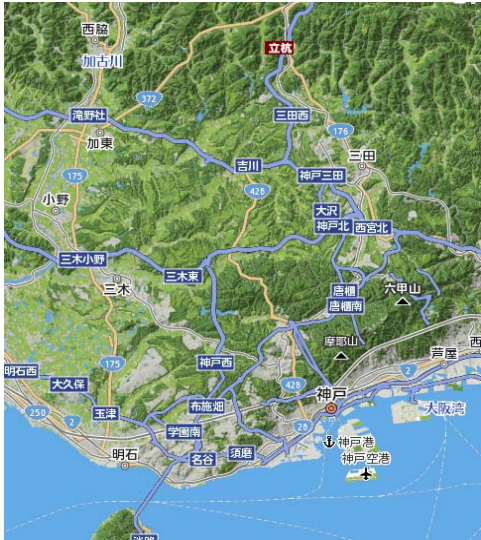




7月10日 久し振りに丹波焼の郷「立杭」を訪ねました。

篠山市今田「立杭」 日本六古窯のひとつの焼き物の郷 今では「立杭」というより、丹波焼の名前の方が通りがよい。

この立杭の郷に植木鉢を専門に焼く「伝市窯」という窯があり、山野草などの愛好家では有名ならしい。

京朝顔の講習会に行ってきた家内が、そう聞いてきて 植木鉢を買いに行こうという。植木鉢の前に腕やと思うのですが・・・

立杭では窯元が共同窯を含め、登り窯で焼くことを売りにしているので、そんな立杭で「植木鉢専門」ということにと興味深々。 植木鉢といえば街の園芸店に行けば いくらも山積みされているというのに・・・。育てる草花で鉢がかわり、ましてや品評会には登り窯で焼いた鉢がええという。

「ほんまかいな???」と思うのですが、インターネットを除くと高い登り窯の鉢がならび、とりわけガス窯で焼いた鉢も含め、丹波焼「伝市窯」の鉢の人气が高い。ほんまかいな・・・とと思っていましたが、愛好家の憧れの鉢だそうである。また 立杭の登り窯が私の知る萩などでよく見る窯と外見がちょっと違うように思えて それをしっかりと確かめようと家内の話に乗って、立杭に出かけました。

私の家からは 北へ山を越えて行けば、約1時間ほど。山に取り囲まれた細長い盆地の緑の中の山際に幾つもの窯元が軒を連ね、登り窯の煙突が幾つも見え、田園を挟んだ反対側には陶芸美術館や陶芸の郷の建物が建つ四季折々に美しい田園風景が見られ、



今 山間の街道沿いでは 今秋の紅が満開 北谷/淡河線で 2012.7.10.



箕谷/淡河線の道筋で見た合歓の花 2012. 7. 10.

道筋の山の緑を眺めに何度も訪れたことがある。道すがら 山の合歓の木が花をつけ、素晴らしい。

遠目では なんや この花と思うのですが、アップで写真を撮るとビックリするほど美しい。

箕谷・淡河・吉川・そして大川瀬へと北にまっすぐ山を越え、大川瀬のダム堰堤を眺めながら舞鶴若狭高速道路の高架をくぐると立杭の盆地の中に入る南の入口三本木峠。峠を下ると緑の田園の中 見慣れた立杭の風景が見えてくる。

いつ見ても美しい陶芸の里 立杭の風景である。窯元の立ち並ぶ立杭のやきもの通りは車が置けないので、反対側の山際の丘の上にある陶芸の郷に車を置いて歩くことにする。



陶の郷から眺めた 丹波焼の郷 立杭

南北に盆地を貫く街道筋の山際に登り窯が幾つも見え、窯元が並ぶ



陶の郷から眺めた 丹波焼の郷 立杭 山際に登り窯が幾つも見え、細い一本道 焼き物通りに窯元が並ぶ

丹波焼の郷 立杭 山際に登り窯が幾つも見え、細い一本道 焼き物通りに窯元が並ぶ

写真中央左に茶色の屋根が奥へ伸びているのが見える。これが立杭で一番古くて大きい登り窯（共同窯）で、その前を左から右へ南北に焼き物通が通っている。インターネットで調べると「伝市窯」は共同窯の右側に見える大きな木のある森が稲荷大明神でその横を奥に入ったところである。

陶の郷に車を置いて共同窯の横の稲荷の森を目印に まっすぐ正面の街並みに向かって歩いてゆく。



正面の山際立杭の街へ向かうが北側には盆地の中を川（四斗谷川）が流れくんだり、山裾に陶芸美術館 美しい田園風景



立杭の里を南北に貫く街道 県道 292 号を横切り すぐ南側坂道の入口にやきもの通りの案内板 2012. 7. 10.

県道 292 号線の脇から、立杭の町並みの中へと続くやきもの通り入口の坂を登る。

この坂道の上 道に沿って 窯元が建ち並び やきもの通りの名前がつけられている

ふと 足元を見るとこげ茶色の丹波焼の陶板が埋められていて、このやきもの通りの道筋の目印になっている。



日本6古窯 焼き物の街 立杭 やきもの通り

坂から立杭の町並みに入ると通りに面するショウウィンドウには丹波焼が並べられ、隣には渦高く薪が積まれた窯場、そして山腹の傾斜を利用した登り窯とその煙突が幾つも見え、陶芸の郷の町並みが続いている。

このやきもの通りを少し北に歩くと、陶の郷から眺めた大きな共同の登り窯の前に出て、登り窯が山腹に伸びている。

随分長い巨大な登り窯である。

又、手前の窯元のところにも長い登り窯が見える。そして これらの登り窯の隣向こうが稲荷大明神の森で、境内にある大きなアベマキの巨木が、森のように見えていたのです。



大きな登り窯が通りの山側に見える稲荷大明神周辺のやきもの通り

中央写真が立杭の登り窯で一番古いもののひとつ 共同窯

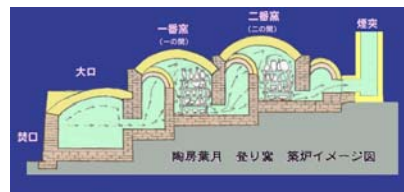
目指す「伝市窯」はこの稲荷大明神のすぐ横。すぐ場所が知れたので、まず 私の興味 この立杭の登り窯を眺めに行く。
ほんとうに長い窯。私の登り窯のイメージと少し違うので興味津々。

以前から気になっていた立杭の登り窯で 全長47m 9袋の登り窯。

この立杭の登り窯では薪を横から投げ入れ燃烧させる部分とその後ろに焼き物を詰める窯詰め部で構成された燃烧室（「袋」というのだそうだ）が幾つも 縦に連結されてひとつの登り窯を構成している。

「袋」ひとつが長いなあ・・・・・・・・。そして 窯の横に幾つも並ぶ窓も気になる。

私の知る登り窯は萩焼窯元などで見た連房式の登り窯で、は一区切りの燃烧室を「袋」とはいわず「房」と呼び、このドーム状の大きな燃烧室に薪を投げ入れる燃烧部と窯詰め部がコンパクトに収まり、次の房のドームが一部乗っかる形で連結されているので、長さはそれだけ短かくコンパクトな長さになっている。



「袋」が繋がる形の立ち杭の登り窯

連房式の登り窯



県指定文化財 丹波立杭登窯

指 定 年 月 日 昭和48年3月9日

所有者・管理者 市野正雄、市野晃司、大上 亨、清水郁夫、田中義治、上立地区

本窯は現在使用中の共同窯である。山の勾配を利用して東西47メートルにわたって長く築かれ、9袋をもつ登窯である。記録によれば、明治28年の構築で、立杭において現存する最も古いもののひとつである。工芸品、雑器を主として焼成している。

現在ではヒドコロをバーナーに、ヒサキ(俗にハチノスという)を煙突にした立杭窯が多い中において、本窯はよく古様を保っている典型的な登窯である。

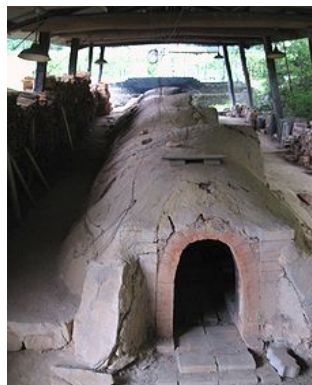
なお、丹波立杭窯の製作技術は昭和32年に国の記録作成等の措置を講ずべきものとして選択されている。

平成4年11月 兵庫県教育委員会

丹波立杭登窯 萩焼の登り窯(連房式の登り窯)などと違う独特の形に 構造が気になっていましたが、今回内部構造を理解しました

インターネットを調べると「陶の郷」の登り窯の窯焚きの様子を伝える写真も見つけました。

立杭の登り窯の横から薪を投げ入れる窓が長く幾つも並んでいるのが、ちょっと不思議だったのですが、構造がわかって疑問が解けました。



丹波焼 丹波立杭陶磁器共同組合 tanbayaki.com

丹波焼 登り窯の構造より

<http://www.tanbayaki.com/2012/top7history18.shtml> より

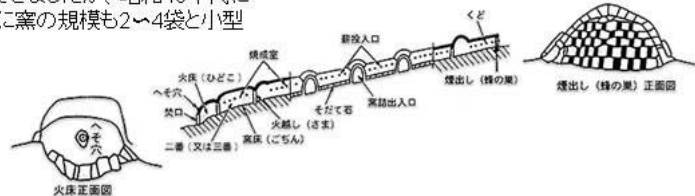
・登り窯の構造

登り窯の築造は、山麓の傾斜地に「そだて石」とよぶ石を並べて基礎とし、割り竹を縄で編んだものを支えとして、両側から「まくら」を半円形に積み上げます。このまくらは、山土を型に入れてこしらえた立方体の日干し煉瓦(れんが)で、現在では鉄板を支えとして積まれることが多いようです。このとき出入り口や燃料の投入口も設けられ、最後に「ござん」とよぶ窯内部の床を厚く塗り固めて完成します。

窯は、焚き口のある「火床」に続いて焼成室が連なっていますが、火床に続く第一焼成室と「くど」とよぶ最先端の焼成室を除く、中間の焼成室の長さはほぼ均等です。この焼成室は「袋」とよばれ、それぞれ下端に出入り口が設けられています。焼成室である袋と袋の境界には2〜4本の柱が設けられ、天井を支える役目をしています。これを「火がき」「火越し」あるいは「さま」とよびます。

窯の先端部のくどには煙出しが設けられ、これは「くど先」「火さき」あるいはその形から「蜂の巣」とよばれています。しかし、最近ではこの火さきに煙突を取り付けたものがほとんどとなり、蜂の巣から吹き出される真っ赤な炎の美しさが見られなくなりました。

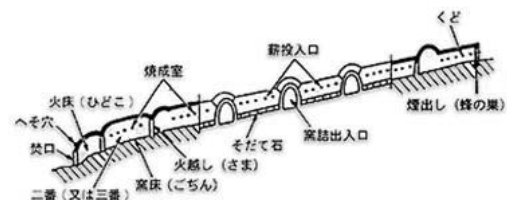
窯の長さは焼成室(袋)の数によりますが、現存する最古の窯として兵庫県の重要民俗資料に指定されている上立杭の登り窯は、明治28年に築造された長さ47メートル、袋数9の窯で、よく古様を保って使用されている代表的な登り窯といえます。かつて多数の袋をもつ登り窯は、いずれも共同窯として使用されてきましたが、昭和40年代に入るところから個人窯が普及し始め、製品の小物化とともに窯の規模も2〜4袋と小型化しました。



丹波焼 丹波立杭陶磁器共同組合 tanbayaki.com

登り窯による焼成

<http://www.tanbayaki.com/2012/top7history19.shtml> より



・窯入れ

成形・釉(くすり)掛け及び乾燥が終わると、製品は窯場に運ばれて焼成室に入れられます。共同窯時代には「かまやかこ」とよぶ竹かごに入れて窯場まで運びました。焼成室に入れる「窯入れ」は、製品を輪台の上に置いて窯床(ごちん)に並べます。小物は、大きなものの中に入れたり、また、サヤ(ゴウともいいう)とよぶ器に入れたりします。製品を重ねて置く場合は、接続部分にモミ灰をつかけたり、土を小さく丸めてモミ灰をまぶした「ハマ」とよぶ玉を間にはさみます。この窯入れが終わると、入り口は「まくら」でふさがれ、粘土で密閉されます。

・窯焼き(窯焚(た)ぎ)

焼成である「窯焼き」は、まず「ぬくめ(あぶり)」から始まります。このぬくめは、温度を徐々に上げていく窯焼きの最初の段階です。昭和30年ごろから、ぬくめの燃料に重油が用いられることが多くなりました。窯の規模によって一定しませんが、ぬくめの作業が30〜40時間経過すると、袋の中の炎は上方へ上がり、各袋に設けられている両側のアナから、燃料の松割り木を次々と投入する本焼きに入ります。こうして室内の温度は約1,300度に達します。

この焼成に要する時間は約60時間で、昼夜兼行で作業が行われます。

登り窯の数倍を要した穴窯による長時間の焼成は、緑色または(鶯(とび)色)を帯びた自然釉の美を生み出しましたが、登り窯における焼成は、燃料である松の灰と人口釉との融合によって、鮮やかな窯変美を生み出すのです。

・窯出し

窯焼きが終わると、焚き口や燃料の投入口であるアナは粘土で密閉され、約一昼夜の冷却時間を置いて「窯出し」すなわち焼成品の取り出し作業を行います。

窯入れからこの窯出しまでは(ほぼ一週間)を要しますが、現在ほとんど全面化した個人窯の場合の所要時間は若干短くなっています。



この大きな共同登り窯の北隣が稲荷大明神の境内で、この境内の堀に沿って北へ入る道があり、そこに「伝市窯」がありました。 又、この稲荷大明神の前 東側がオープンになっていて、田園の向こうに車を止めた陶の郷や陶芸館が見えている。



やきもの通り 稲荷大明神の巨木アベマキ [その横の細い道を山側に入ったところに「伝市窯」がありました](#)



稲荷大明神前から 東側 田園や川の向こう側に左 陶芸美術館 右 陶の郷 2012. 7. 10.



稲荷大明神の境内の堀に沿って北へ入る道を入った右手が「伝市窯」

「植物にやさしい鉢」それが「伝市鉢」 山野草愛好家から絶賛の人気を呼ぶ

植木鉢なんて…と思っていましたが、 植物を育てる鉢としてのこだわりが 「伝市鉢」の真骨頂
土・配合・形 そして 焼成 それらすべてに 伝市鉢の創意工夫が注ぎ込まれている
ちなみに多用途の焼き物の流用や土や形の流用では 植物は腐ったり・枯れたり すくすくとは育たないと……

揺ぎ無い工夫と自信が「植物にやさしい鉢」を生み、 それが山野草愛好家から絶賛の人気を呼ぶ

80を超えたお歳とは 思えぬ 焼き物への情熱とあくなき挑戦 びっくの陶芸家さんでした



伝市窯の窯元 市野伝市氏は 本当に気さくな方で、植木鉢を焼く魅力
そして 窯焚きの魅力を次から次へと話してもらいました。
陶芸家というより、根っからの陶芸の職人さんといった感じの方でした。

また、話している途中で、ひっきりなしに 注文の電話 それも 何ヶ月も待たねばならぬ登り窯で焼いたもの・・・ビックリ。家内もすっかり気に入って、訪れた記念写真も取って、朝顔仲間も含め、朝顔用の植木鉢を沢山買い込みました。



伝市窯 市野伝一さんの作陶風景



インターネットで見つけた伝市窯の登り窯

伝市窯の植木鉢は底の穴が大きく植木鉢そのものの通気性も良く草花の根が腐りにくく、良く育つのだそうだ。

「丹波焼が植木鉢に良いのであれば、みんな 作りそうですね」というと、
笑いながら「器の土そのままで焼いたら 草花みんな枯れてしまう。

配合・形・大きさ みんな草花にあうよう長年 工夫している。

そやから 鉢の底には「伝」の印が押したある 」と自信に満ちた答え。

そらそうやなあと。

そんな間にも 植木鉢がひとつ出来上がりました。

80 歳を超えた人とは思えぬ元気な方で、ろくろを回す作陶のすぐそばで写真を取らせてもらったり、また買った植木鉢も自ら梱包してもらいました。

ビックリの陶芸家さんですが、こっちの気分も爽快手ひねりで 植木鉢専門に作る陶芸家さんが折られることにもビックリしましたが、植木鉢一つ一つに込めた陶芸の技 知らぬ世界でしたが、ここにも「日本のものづくりの技」があると・・・。

「今度立杭に来たら又 訪ねよう。」と。

エネルギーをもらって 伝市窯を後にしました。



求めた伝市窯の植木鉢 もっとも 登り窯のものではありませんが・・・

2012. 7. 10. by Mutsu Nakanishi



《 追伸 》

7月末になって 朝顔が咲き出しましたが、
伝市窯の鉢に植え替えた朝顔はまだ咲かず。

植え替えると 花が咲くのが遅れるようですが、
花芽が一杯ついているので、まもなく咲くでしょう。



【参考】

◎ Country Walk 風来坊 2008

新緑の里山をぬけて 日本6古窯の一つ 陶芸の郷 立杭へ 2008. 4. 16.

【PDF 写真アルバム】2008 新緑の里山をぬけて 陶芸の郷 立杭へ

<http://infokkna.com/ironroad/2008htm/2008walk/7walk07.pdf>

◎ Country Walk 風来坊 2011

初窯・本焚きの見学記 2011. 1. 15.

山口市吉敷 萩焼陶芸家 田中講平さん自作の登り窯

<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/walk8/1103tnkahatsugama00.htm>

◎ 萩焼 陶房葉月 田中講平さんのホームページ <http://www.k2.dion.ne.jp/~hazuki/>

■ 陶房葉月 登り窯築造日記

<http://www.k2.dion.ne.jp/~hazuki/daybook/daybook00.htm>